

審査の結果の要旨

氏名 江本 弘

本論は 19 世紀イギリスを代表する美術・建築批評家ジョン・ラスキン（1819-1900 年）の言説や思想がどのように受容されていったかについて、北アメリカの建築論壇に焦点を絞り明らかにした建築史研究である。『建築の七燈』や『ベニスの石』などの著作は世界中で読まれた古典であり、いまなおラスキンの言説は、建築はもとより美学、文学、社会学など多方面の分野の基礎文献としての位置を占めていることは疑いない。しかしながら、その各文化圏や学問分野におけるラスキン受容そのものを扱った先行研究はさほど多くなく、その実証レベルも十分な段階に達していない。とりわけ建築の分野では、アメリカのヘンリー＝ラッセル・ヒチコック、イギリスのニコラス・ペヴスター、レイナーバンハムによる近代建築史におけるラスキンの否定的見解やアメリカのルイス・マンフォードの肯定的な位置づけの両極端があり、必ずしも定見をみているわけではない。またラスキン受容史を捉える実証的な方法論はいまだ確立していない。本論はこうした先行研究の状況を批判的に再検討し、史料を博搜したうえで、議論の俎上に載せうるさまざまな論点を抽出し、ラスキン受容を建築史のなかで定位することを試みた挑戦作である。実証レベルの高さ、議論の広がりや深さ、行論の妥当性など、近代建築史叙述における一つの新機軸を示した重要な作品といえることができる。本論で繰り返し述べられているように、本論の目標はラスキンそのものではなく、ラスキン受容史という特異点から拓がるあらたな近代建築史の全体像である。

本論は「はじめに」「序章」「第一章～第六章」「結語」からなり、巻末に「初出一覧」「補論 ラテン語の七燈と建築創造」「付録：ラスキン受容関係史料年譜・相関図」「図版出典」「注」「参考文献」「出典」「人名索引」が付された本格的な構成を示している。以下、各章の内容を概観する。

「はじめに」ではラスキンの受容史に関する先行研究のレビューが行われる。ラスキン研究は第二次世界大戦以降進展したが、最初はイギリスにおけるヴィクトリアン・ゴシック研究との関係でラスキンが論じられた。とくにラスキニアンという語に込められたモダニズム以前の社会主義的伝統という含意は近代

建築史叙述に大きな影響が認められる。一方、アメリカではかなり早い段階からラスキンの位置づけをめぐる論考が登場し、とくにヒチコックとスタインによるラスキン受容史に関する主要な論点を提示したという点で特筆に値する。1960年代以降は世界各地でラスキン研究が展開を見せたが、ラスキンの多義性が豊富化する傾向が強く、方法論的な未熟さはいまだ克服されていないと著者はみる。本論の方法はこうしたラスキン受容が19世紀以降の広い時代、広い地域、広い論壇のなかに分布し言及されてきた事実を逆手に取り、ラスキン受容を一つの切り口として近代建築思想史への世界史的アプローチの拓くというものである。

序章でまず本論の全体構成を概観したのち、第一章では1840年代半ばから60年代初頭までの約15年間が取り上げられる。アメリカ版『モダン・ペインターズ』と『建築の七燈』が出版される時代背景とその受容の様態が分析される。両書は本国を越える熱狂をもってアメリカに受け入れられた。その土壌にはアメリカにおけるエマーソンの超越論的世界観、工業の発展、都市ニューヨークにおけるダウニングを代表する建築論壇の志向性などが特徴としてあげられる。アメリカでは『建築の七燈』の海賊版が出回るほど広汎な読者層を得た一方で、ラスキンのもつ生命的＝機能論的性格と反工業的保守性の両義性が初期条件として埋め込まれたことを指摘している。

第二章は続く1860年初頭から75年前後までの15年間が対象になる。この時期、ラスキン受容と並行して行われたヴィオレ＝ル＝デュク受容がアメリカ論壇に独特の彩りを与える。エコール・デ・ボザール卒業生が増加する1850年代半ば以降、アメリカの建築界は従来のイギリスの美学・建築理論の摂取と並行してフランス建築界への関心が高まってゆく。ラスキンの建築理論と並んでヴィオレ＝ル＝デュクがあらたな参照点として浮上する。いま一つの新たな潮流としてはラスキンをエンジニアリングの文脈のなかで捉え直す傾向が挙げられる。橋梁設計に代表されるエンジニアリングの美学を語るうえで、ラスキンは重要な参照源として再定位される。

第三章は1860年代から90年代のおよそ30年間、すなわちアメリカ建国100年記念博覧会前後の時代が扱われる。この章は大きく2部に分けられ、第1部ではヴィオレ＝ル＝デュク受容をゴシック・リバイバルの文脈から辿り直し、60年代にはあくまで傍流にとどまっていたゴシック・リバイバルがその後主流に転じてゆく瞬間が捉えられる。博覧会はまさにその中間点に位置する。第2部では、同時期にイギリスからあらたな流行として導入されるクィーン・アンアメリカへの定着と議論が紹介される。

第四章では、アメリカ最後のゴシック・リバイバルと目される「カレッジエイト・ゴシック」が検討対象になる。1890年代から1900年代末までの20年間は、

コレジエイト・ゴシックの是非を論じつつ議論された様式と現代建築の関係、伝統と革新の位相があらわになる時期である。そのもっとも象徴的な出来事がラーキン・ビルディングの様式性をめぐる世代間の認識の隔たりであった。

第五章は、1900年代初頭から30年頃までは、アメリカ建築論壇において「機能主義」がいかにかに語られはじめたかという、モダニズムの開始期をめぐる問題と、ラスキン建築論の否定をひとつの契機にもつ建築の近代主義の背景が扱われる。

第六章は第一章から五章までの総括となる章であって、19世紀末にはじまるアメリカ建築史の研究史の展開過程をラスキンの描かれ方を通してふたたび通史として捉え直す。その終点は1950年頃であり、最初に取り上げられたグリーンウとラスキンの比較言及の多様性と対照性へと議論は回帰する。ここにおいて、1840年代半ばから議論がスタートしたアメリカ建築史をめぐる思考はひとつの円環をなして終わることになる。

「結語」ではアメリカ建築史の特異性とその特異性を浮かびあがらせるラスキンへの言及の振幅と矛盾が再度確認される。なお、補論は本論の全体とはやや研究目的の異なる論考であるが、『建築の七燈』の原典批判の試みである。

以上、本論は膨大な史料探索を基礎に据えながらも、単なるデータベース的思考にとどまらない、きわめて広範な視野と歴史の細部への目配りが随所に散りばめられた作品であり、あくまでラスキン受容に執着しつつ、都市をノードとして展開する北米建築論壇史を通史として描き切った論文として建築史分野の既往研究に新たな一頁を加えることに成功した。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以 上